

台湾の歴史教育からみた台湾市民像の特質¹

小川 佳万²

小野寺 香³

石井 佳奈子⁴

はじめに

近年グローバル化が進展し、国境を越える人々の移動が盛んになるとともに、世界各国は「多文化共生」を社会の目標として掲げるようになってきている（JICA, 2007）。それは学校教育や経済活動において異なる文化を有する人々との接触が日に日に顕在化してきており、彼らとどう関係を構築していくかは重要課題として認識されてきているからである。そのことはまた、「多文化」の中で異なる背景を持つ人々を同化させることなく国民としてあるいは市民としていかに共生していくかは、社会の安定や発展にとって共通の課題であるといえる。

ところで、台湾では社会の安定のために、統合という課題に長年向き合い続けてきた。周知の通り、台湾は第二次世界大戦後、国共内戦に敗れた中国国民党によって統治が開始され、中華人民共和国との対立関係もあり、中華民国人（＝中国人）としての意識の涵養を教育政策の重点としてきた（Liu, 2004）。つまり「中国人」の育成によって社会の統合を図った。

いっぽう、1990年代前後以降は、民主化の高まりとともに台湾ナショナリズムも台頭し、「中国人」ではなく、「台湾人」の形成を目指す教育の必要性が強調され、そのためのさまざまな施策がなされてきた（山崎, 2009）。その顕著なものは2000年代に登場した「認識台湾」という教科であり、これは従来の「社会科」から独立し、そこに「地理編」「歴史編」「公民編」が具体的な科目として設定された。ただし、以後、過度なナショナリズムの牽制が台頭し、現在ではその新教科は廃止されている。しかしその内容は、従来から

¹ 本報告は、公益財団法人 JFE21 世紀財団「アジア歴史研究助成」による共同研究（代表者：小川佳万）の成果の一部である。貴財団からの援助を受けた直後から COVID-19 感染拡大にともない、従来計画していた研究活動は延期及び修正を余儀なくされた。そうしたなか研究の延長をお認めいただいたこと、そして何よりも貴財団からの貴重な助成によって本研究の遂行が可能となったことに心からの感謝を申し上げたい。なお、本文は、小川佳万・小野寺香・石井佳奈子「台湾の歴史教科書にみる統合概念」『学校教育実践学研究』（第 28 巻，2022 年，129－136 頁）に加筆修正したものである。

² 広島大学・大学院人間社会科学研究科・教授

³ 奈良女子大学・文学部・准教授

⁴ 広島大学・大学院人間社会科学研究科・大学院学生

ある「社会科」のなかの「地理」「歴史」「公民」のなかに一領域として定着しており、必ずしも台湾ナショナリズムが後退したとすることはできない(林, 2009)。

こうした動きを簡略化すれば、台湾社会の統合において目指されてきたのは「中国人」から「台湾人」の育成への移行と言えるが、周知のとおり中華民国は現在国際社会では承認されておらず、実際、新聞や論文で「台湾人」という語を使用する一方で、「中国人」や「国民」も用いられ安定していない。いずれにせよ、国際社会で不安定な立場にある台湾にとって、グローバル化とともに社会の統合の在り方が議論され続けてきたことは確かである。

ところでこの統合のための「台湾人」を考える場合、その構成要素、下部概念に注目することが重要である。その中で特に、現在 16 民族が認定されている(行政院, 2022)台湾に居住する少数民族(以下原語のまま「原住民族」とする。)をどう包摂するかという課題は長年議論されている。その場合、対称となるのがマジョリティとしての「漢族」であり、人口でみた場合、2022年時点で96.42%と台湾においても圧倒的多数を占めている(行政院, 2022)。こうした状況において、「台湾人」を構成する下位概念として両者をどのように関連付けるのかが重要であろう。そして、少数民族と漢族の関係を考察する場合、中華人民共和国のそれも視野に入れる必要があるであろう。少数民族を重視してきたと自ら公言する中国において(陳・閔, 2021)、マジョリティたる「漢族」を「中国人」の下位概念としてどう位置付けているのかも検討することで、台湾の特異性が浮かび上がってくるであろう。

以上のような問題関心を背景に、本論では、高級中学(日本の高校段階に相当)で使用されている歴史教科書を材料として、また中国の教科書とも比較することで、統合概念としての「台湾人」や「中国人」と「漢族」との関係の解明に迫っていくことにしたい。言うまでもなく教科書は検定を経た「公的知識」であり、政府がどのような統合を考えているかの一端を明らかにできると考えられる。

以下では、まず教科書の分析の前提となる「漢族」の歴史について概観し、次に研究対象の設定と分析方法を述べる。続く教科書分析では、第一に台湾の教科書において、「漢族(人)」と他の関連語がどのような関係にあるのかを分析する。第二に歴史教科書を台湾史とアジア史に分けてそれぞれ「漢族」がどのように位置づけられているかを分析する。第三に、中国の歴史教科書を加えて、両者での「漢族」の位置づけを比較することにする。そして最後に全体のまとめの考察を行う。

1 台湾における漢族の歴史

現在、台湾のエスニック的境界線として最も使用されているのは「四大族群」であろう。この区分は、民主化・自由化が進んだ2000年前後から多用されるようになった(葉, 2003)。「四大族群」は「閩南人」「客家人」「外省人」

「原住民族」という4つのエスニック・グループで構成されており、台湾に住む多くの人々はこの区分のいずれかに属していると考えられる（ただし2000年代後半から、主に東南アジアからの移住者が増えており、彼らは台湾で「新住民」と呼ばれ、新たなエスニック・グループとして認識されてきている）。

しかし、この「四大族群」の区切りは、よく見れば少なからず違和感を覚えるものとなっている。山崎（2009）は、「例えば、『四大族群』では、同じ漢民族である閩南・客家・外省人がそれぞれ別カテゴリーとされる一方、異なる母語と文化を持つ複数の先住民族は原住民のカテゴリーに一括されており、これにはある種の政治的意図が見え隠れしていると指摘している。このように、「四大族群」は漢族と原住民族という区切りから、さらに漢族を細分化させたものであるといえる。

次に、漢族にルーツをもつ「閩南人」「客家人」「外省人」について、台湾島にやってきた時期や特徴について概観していききたい。まず、「閩南人」は福建省南部から台湾島に移住してきた人々を指す。鄭成功時代、つまり17世紀半ば頃に大量に移住したとされ、現在では最大の族群となっており人口の約70%を構成しているとされる（劉，2007）。次に、「客家人」とは中国広東省や福建省、江西省などから、明代後期頃に大量に移り住んだ人々である。「閩南人」「客家人」ともにエスニック・グループとしては漢族に属するが、「閩南人」は「閩南語」（「福佬話」とも呼ばれる）を、「客家人」は「客家語」を話すというように、両者には言語的な差異がある。しかし、戦後から1980年代まで両者の差異が強調されることはなかった。差異が強調され始めた1980年代に民主化・自由化運動を率いた「党外人士」が掲げた「台湾意識」について、「閩南人」と「客家人」で意見の相違があったためである。「新世代の党外運動家は「台湾民族の言語」を規定する際、その大多数が使用している「福佬語」を、反体制運動における実践的な使用を通じて、「台湾語」として定義した」（王，2014）とされるが、客家活動家からすれば、閩南人の言語文化に迎合することで客家人の地位と名誉は回復することなく、抑圧への危機感から、閩南文化に対抗した客家文化復興運動が展開され、現在では客家人も閩南人と並ぶ「四大族群」とみなされている。

そして最後に、「外省人」については、第二次世界大戦終結後、中国国民党とともに大陸から台湾に移動した人を指すが、彼らの出身は様々である。そして彼らは、1980年代まで政治面では圧倒的に多数派であり、社会的な危機感を覚えることもなかったため、同胞意識はあまり芽生えなかった。しかし、2000年に陳水扁政権が発足し、台湾が本格的な「本土化」へ向かうとともに、社会的に少数派となることに危機感を覚えた外省人のなかで「我々」意識が芽生え、「族群」の一つであると認識するようになった。ただし、外省人たちの危機感だけが「外省人」意識を高めたのではなく、「四〇年以上にわたる台湾での生活という歴史的体験の共有も、彼らに共通の「族群」意識を抱かせる要因となった」（沼崎，2014）とされる。

以上のように、「四大族群」のうち特に「閩南人」と「客家人」については、移住してきた時期こそ異なるものの漢族をルーツにもつという共通点があり、同一視されていた時期も存在する。その彼らに「族群」としての意識が芽生えたのは、1980年代以降であり、この「四大族群」という概念は人為的に作成されたと言わざるを得ないだろう。ここから言えるのは、エスニックな境界線は、その捉え方次第でいかようにも引き直せるということである。以下では、このような視点も踏まえながら、台湾の歴史教科書について分析を進める。

2 研究方法

(1) 分析対象

本研究では高級中学段階の歴史教科書を対象として分析を行った。歴史科を選択した理由としては、この科目が生徒の「国民」意識の形成に強く影響を与えていると考えられるからである。アントニー・D・スミス(1998)は、「①歴史上の領域、故国、②共通の神話と歴史的記憶、③共通の大衆的・公的な文化、④全構成員にとっての共通の法的権利と義務、⑤構成員にとっての領域的な移動可能性のある共通の経済」をナショナル・アイデンティティの基本的特徴として示した。このなかで、特に①②③については、学校教育で、さらに言えば歴史教育で特定の情報や価値観が共有され共通化していると言えるだろう。

そして、その内容は言うまでもなく政府によって定められたものである。現在、台湾は「一綱多本」と呼ばれる教科書検定制度を採用している。つまり、細部には出版社ごとの特徴が見られるとしても、検定を通過しているという点でいえば、どの教科書を使用しても台湾政府によって認可された公的知識が生徒たちに伝達される。以上を踏まえれば、国民統合という文脈のなかで台湾政府が「漢族」をどのように位置づけているかを明らかにするために、歴史教科書を分析することは有効であるといえるだろう。また、台湾では99%以上の生徒が高級中学を修了すること、そして教科書内容の深度という観点を踏まえ、今回は高級中学段階を分析対象とした。

教科書は、現時点で最新である2018年の「課程綱要」(日本の学習指導要領に相当)に基づいて編纂されたものであり、台湾内でシェア率の高い三民書局(『高級中学・歴史』,2019)と龍騰文化出版(『歴史』,2019)のものを分析した。加えて、台湾の歴史科は台湾史・アジア史・世界史と3つに区分されているが、今回は「漢族」と関連が強いと推測される台湾史・アジア史に限定して分析をおこなった。分析の後半では、比較対象として中国の歴史教科書も使用したが、こちらは2017年に公布された「課程方案」に基づいて編纂された人民教育出版社(『歴史』①から『歴史』③まで)と人民出版社(『歴史』第一冊から第三冊まで)のものをを用いた。また、中国・台湾ともに歴史科は必修課程と選修課程とで構成されるが、本研究ではほぼ全ての生徒が履修して

いとされる必修課程のみを分析範囲として設定した。

(2) 分析方法

本研究は、教科書の中で「漢族」がいかにかに記述され、どのように位置づけられているかを明らかにすることを目的としている。そのため、まず計量的分析手法を用いて、「漢族」またはこれに類する語がどのような語と関連を持っているかを探索する。ここではテキスト型（文章型）データを統計的に分析するためのフリーソフトである“KH Coder”を使用した。このソフトは特定の語の出現回数のカウントや、それと関連性の強い語の抽出が可能であり、教科書を客観的に概観するのに有効である。その後、関連語の特徴を踏まえながら、「漢族」に関する実際の記述を文脈に沿って検討する。

3 分析結果

(1) 台湾の歴史教科書における「漢族」と「漢人」

教科書全体の特徴を捉えるために、はじめに共起ネットワーク分析を行った。共起ネットワークとは、「出現パターンの似通った語、すなわち共起の程度が強い語を線で結んだネットワーク」を指す（樋口，2020）。今回は、「漢族」というエスニック・グループについて着目するため、前処理として「漢族」に類する語を KH Coder の語彙検索機能及び筆者らの目視によって抽出した結果、「漢族」以外に「漢人」という語が教科書内で使用されていることがわかった。そのため、以下では「漢族」及び「漢人」に着目して分析を行った。

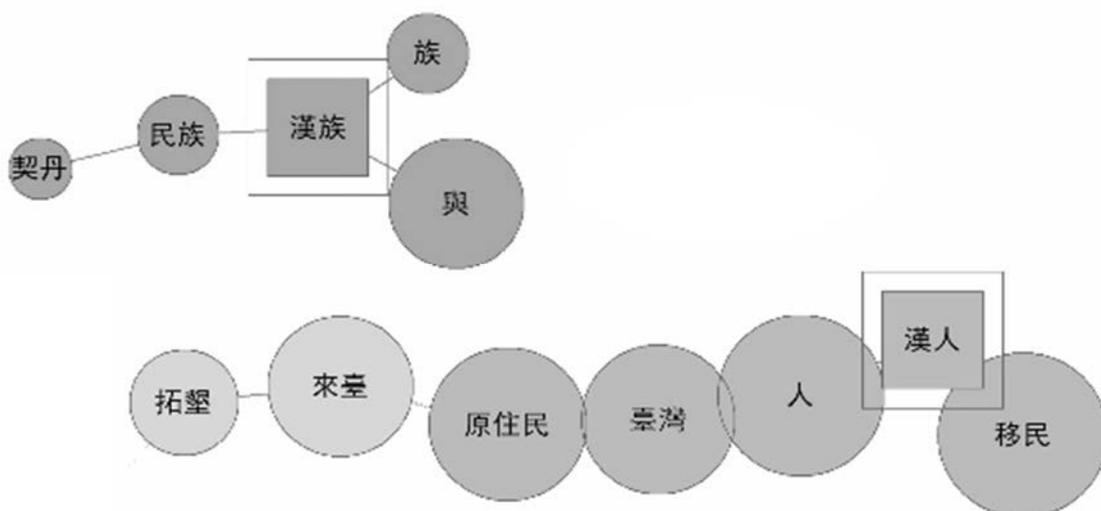


図1 「漢族」及び「漢人」の共起ネットワーク（一部）

図1は、「漢族」「漢人」という語についての共起ネットワークを図示したものである。図中の円は語句を示しており、この円の大きさは文中、今回でいえば歴史教科書のなかでの出現頻度を表している。ネットワークという言葉の通り、これらの円（語句）は線で繋がっており、この線はJaccard係数に基づき引かれている。Jaccard係数とは、簡単に言えば語と語の頻出の度合いの強さを数値化したものであり、これは「語Aと語Bが同時に使用された数/語Aと語Bのどちらか一方でも出現した数」によって算出される（松尾ら、2005）。共起ネットワークでは、Jaccard係数に基づいて語と語の間に線が引かれているか否かが重要であり、図中の語の位置や線の長さは意味を持たない。

さて、「漢族」または「漢人」と出現パターンが似通った語77語の間で1514の共起関係がみられたが、そのうちJaccard係数が大きい順に60の共起関係を線として描画したネットワークの一部が図1である。Jaccard係数の最小値は0.294であった。この図をみて最初に分かるのは、「漢族」と「漢人」との間に線が引かれていないことである。これは、「漢族」と「漢人」の共起関係が極めて弱い（または関係がない）ことを示している。つまり、「漢族」と「漢人」は、歴史教科書の中ではそれぞれ異なる文脈で使用されているといえる。では「漢族」と「漢人」はそれぞれどのような文脈で使用されているのか、共起関係にある語をみていきたい。

まず、「漢族」に着目すると「民族」という語と線で繋がっている。「民族」はさらに「契丹」とつながっており、これは大陸中国の歴史の文脈によるものであると考えられる。「民族」という語は日本と同様、台湾でも「エスニシティ」という意味を有する語である。ただし、中国語圏、特に大陸中国では「民族」は“nation”と訳され、時に「国民」を想起させる語である。その一方で中国語圏では「民族」に非常によく似た言葉として「族群」が存在する。これは、台湾でも「四大族群」としても使用され、しばしば「エスニック・グループ」と訳出される。この2つの語について、馬（2004）は「一定の文化的遺産や歴史を持つ集団である「族群」と、一定の領土に結びついた政治的存在である「民族」には重要な違いがある」と主張しているように、ややもすれば混合しやすい両者だが、実はそれが意味するものには明確な違いがあると認識されている。これらを踏まえると、漢族が「族群」ではなく「民族」と共起関係で結ばれているという結果は、台湾政府が「漢族」をどう位置付けているかを知る手掛かりになるといえる。

次に、「漢人」についてみると、「移民」と、そして「人」「台湾（臺灣）」「原住民」「來台（臺）」「拓墾」といった語が連なっている。これらの語からも「漢人」は台湾と強いつながりを持つ語であるといえる。また、「漢人」が「移民」と直接線で結ばれていることからわかるように、「漢人」は台湾島の外からやってきた人々と位置付けられていることがわかる。ここからわかるのは、漢族（「漢人」）がやって来る以前、つまり原住民族のみが居住していた時代を台湾における「歴史」の出発地点として設定しているということ

である。実際、今回分析に使用した「台湾史」教科書では、どちらも第1節で原住民族の歴史や文化を描いており、三民書局に至っては「台湾の最初の住人（臺灣最早的住民）」と題していた。

以上のように、「漢族」または「漢人」について共起ネットワーク分析を行ったが、ここからいえるのは、歴史教科書は「漢族」と「漢人」とを明らかに使い分けており、「漢族」は大陸中国の文脈で、「漢人」は台湾島内の文脈で使用されていると仮説を立てることができそうである。

(2) 中国の「漢族」、台湾の「漢人」

上記の仮説を踏まえ、以下では「漢族」と「漢人」とを区別して分析を行う。前述したように、台湾の歴史科は、「台湾史」「アジア史」「世界史」と区別されているため、「台湾史」「アジア史」に分けて再度、共起ネットワーク分析を行った。

まず、「台湾史」の教科書を対象に、「漢族」と「漢人」に着目して共起ネットワーク図は作成した。その結果、「漢族」に関するネットワークを形成することができなかった。それは「台湾史」教科書2冊のなかで「漢族」という語がたった1度しか登場していないためである。共起ネットワークは複数の文から語の特徴を探るため、1度しか登場していない語ではネットワークを形成することはできない。なお、その1回は龍騰文化出版教科書の「ただし『蕃』という呼称には、漢族中心の思想や文化差別的な意味合いが強く含まれている（但「番」的称呼，帶有濃厚的漢族中心本位思想与文化歧視的意味。）」（下線は筆者）という文中で使用されており、これは清朝統治期の原住

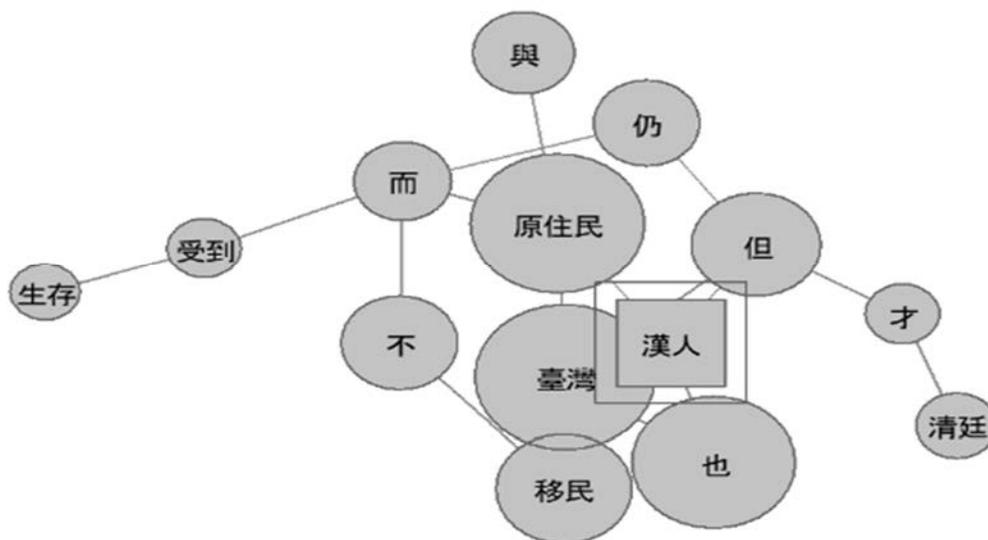


図2 「漢人」(台湾史)の共起ネットワーク(一部)

民族の呼称についての記述である。

「台湾史」における「漢人」に関する共起ネットワークは、図2のようになった。「漢人」との関連語76語の間で1793の共起関係がみられたが、こちらも図1同様 Jaccard 係数が大きい順に60の共起関係を線として描画したものの一部である。こちらの Jaccard 係数最小値は0.231であった。図2で析出されている語の多くは図1でも登場しているものであった。ここからも、台湾の歴史的な文脈のなかでは「漢人」という語が意図的に使用されていることがわかる。また、「漢人」と「原住民」が線で結ばれている。教科書本文をみても、「漢人」と「原住民」との関係が頻繁に記述されており、例えば以下のようなものがある（下線は筆者）。

「清朝統治期以来、〔平埔族は〕長期に渡って漢人文化の影響を受け、彼らと漢人との差異は次第に不鮮明となっていたため、過去にはしばしば漢人と見なされていた。（清治以来又長期受漢人文化影響，使其与漢人的差異漸不明顯，過去還常被視為漢人。）」（三民書局，〔〕内は筆者）

「また、漢人は原住民の土地を耕すことも禁止されていたが、漢人の人口増加に伴い、台湾原住民の生活空間は衝撃を受け、オランダ統治時代よりも深刻な生存危機に直面することになった。（另外，也禁止漢人侵墾原住民土地，但随漢人数日增，臺灣原住民的生活空間遭受衝擊，面臨比荷治時期更嚴重的生存危機。）」（龍騰文化出版）

上記の記述からもわかるように、教科書中に登場する「漢人」は、しばしば原住民族を圧迫する存在として描かれていることがわかる。このような記述は、原住民にたいする配慮であり、漢族（「漢人」）中心主義に陥るのを阻止していると考えられる。「台湾史」における「漢人」という統合概念は、台湾の圧倒的多数の歴史記憶を形成するとともに、大漢族主義に陥るのを阻止する役割を担っているといえる。

次に、「アジア史」における「漢族」または「漢人」の記述をみていきたい。先程と同様、「アジア史」において「漢族」「漢人」それぞれの共起ネットワークの形成を試みた。その結果、先程とは反対に、「漢人」で共起ネットワークを形成することはできなかったが、「漢族」ではネットワークを形成できた。今回は、「アジア史」において「漢人」が他の語と共起の度合いが低かったことが原因と考えられる。言い換えれば、「漢人」が使用される文脈の特徴を見つけることができなかったのである。

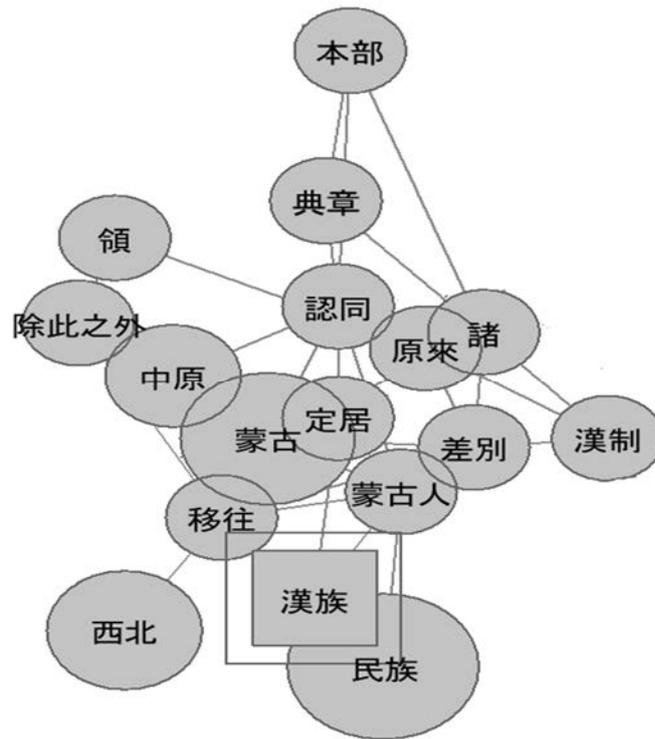


図3 「漢人」(アジア史)の共起ネットワーク(一部)

一方で、「アジア史」における「漢族」についての共起ネットワークは図3のとおりである。そこからわかるように、「漢族」と線で繋がっている語は「モンゴル(蒙古)」や「中原」(黄河中下流域にある平原であり漢族発祥の地とされる)といったものであり、大陸中国に関する歴史の文脈で使用されていることが推測できる。具体的な使用例は以下のとおりである。

「唐代以降、タングート族は漢族と雑居したことにより、生活や文化面で次第に漢族からの影響を受けた(唐代以来、党項族即与漢族混居，生活与文化逐渐受到漢族影響。)」(龍騰文化出版)

このように、「漢族」は他民族へ生活・文化面で影響を与えているとされる一方で、「アジア史」において「漢族」が使用されていたのは11箇所と、出現回数自体は少ない。

以上より、「漢族」と「漢人」は歴史教科書の中で明確に使い分けがなされており、「漢人」は台湾の文脈で、「漢族」は大陸中国の文脈で使用されていることが明らかとなった。ただし、「漢族」自体は出現回数も少なく、歴史教科書に限って言えば、統合機能が付与されている可能性は大きくないといえる。

(3) 台湾人と日本

以上のとおり「台湾人」を構成するための下位概念を分析した結果、台湾の歴史教科書「台湾史」では、台湾社会で一般的に使用されている「四大族群」に関する語はほぼ使用されておらず、「原住民（族）」または「漢人」が統合概念として用いられていることがわかった。続いて「台湾人」についても考察していきたい。

「台湾人」という語句は「台湾史」教科書に 36 回出現し、共起ネットワークを行うと図 4 のようになった。

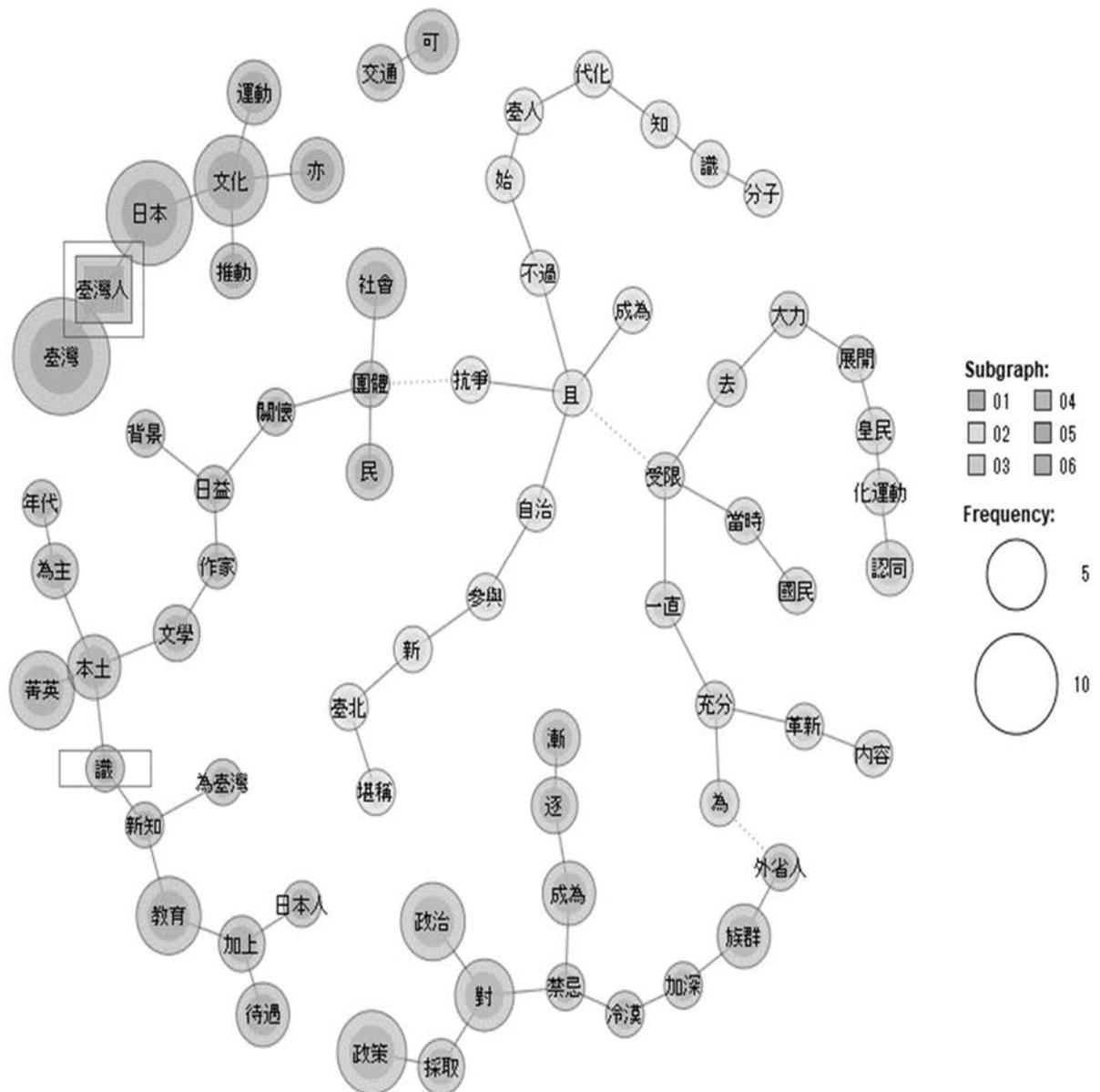


図 4 「台湾人」の共起ネットワーク（一部）

この図 4 から分かる通り、「台湾人（臺灣人）」は「台湾（臺灣）」そして「日本」と共起していた。台湾の歴史を踏まえれば、「日本」と関連が強いのは言うまでもなく日本統治時代であろう。その証拠に、図 4 全体をみても、

日本統治時代を想起させるような語が多く共起している（例えば「皇民」「日本人」など）。

では、具体的に、どのような文脈で「台湾人」と「日本」について記述されているのだろうか。以下は、三民書局及び龍騰文化出版の歴史教科書本文の記述を引用したものである。

「1936年以降、日本の対外膨張政策が鮮明になり、皇民化運動が始まると、総督府は台湾人の日本への帰属意識を強めるため、神道信仰を強力に推進し、台湾の各街に神社ができるようにと「一街庄一社」運動を始めた。（1936年以後、當日本對外擴張政策逐漸明朗，皇民化運動展開，總督府為強化臺灣人對日本的認同，大力宣揚神道教信仰，展開「一街庄一社」的運動，希望臺灣每個街庄都有自己的神社。）」（三民書局）

「日本は50年間台湾を統治し、台湾人を徐々に同化させ、最終的には台湾人を日本国民とすることを目的としていた。（日本統治臺灣五十年，統治方針為逐步加強同化臺灣人，最後改變臺灣人的認同，成為日本國民。）」（龍騰文化出版）

「日本の植民地制度の下で、台湾人の意識が徐々に形成され、知識人は伝統と近代化の間、中国文化と日本文化の間で衝突し、攪拌し、融合し、台湾文化の独自性を徐々に構築しました。（在日本的殖民體制下臺灣人意識逐漸形成，知識分子們在傳統與現代化之間，漢文化與日本文化之間碰埋，激盪與融合，逐步構築出臺灣文化的獨特性。）」（龍騰文化出版）

以上の文章はいずれも、日本統治時代における「台湾人アイデンティティ」について言及したものとなっている。実際、「台湾人」という語句が使用されているのは日本統治時代以降である。ここから、「台湾史」の教科書においては、「台湾人」という統合概念が日本統治時代以降に形成されたと位置づけているといえる。それ以前の、例えばオランダ統治期ではまだ台湾が一つの社会として形成されていなかったであろうし、清統治時代は漢人移民にとって中国大陸は帰属意識の一部となっていた。それに対して、日本統治時代は「日本」という他者が台湾を近代化しようとし、かつまとまりのある社会を形成しようとした時代である。それにより逆説的に台湾の人々が「台湾人アイデンティティ」を持つきっかけを作ったのではないだろうか。この点は極めて重要な問題であり、今後さらなる検討をしていきたい。

(4) 中国の教科書との比較

最後に、マジョリティたる「漢族」の扱いについて、大陸中国の歴史教科書とも比較しながら検討していきたい。

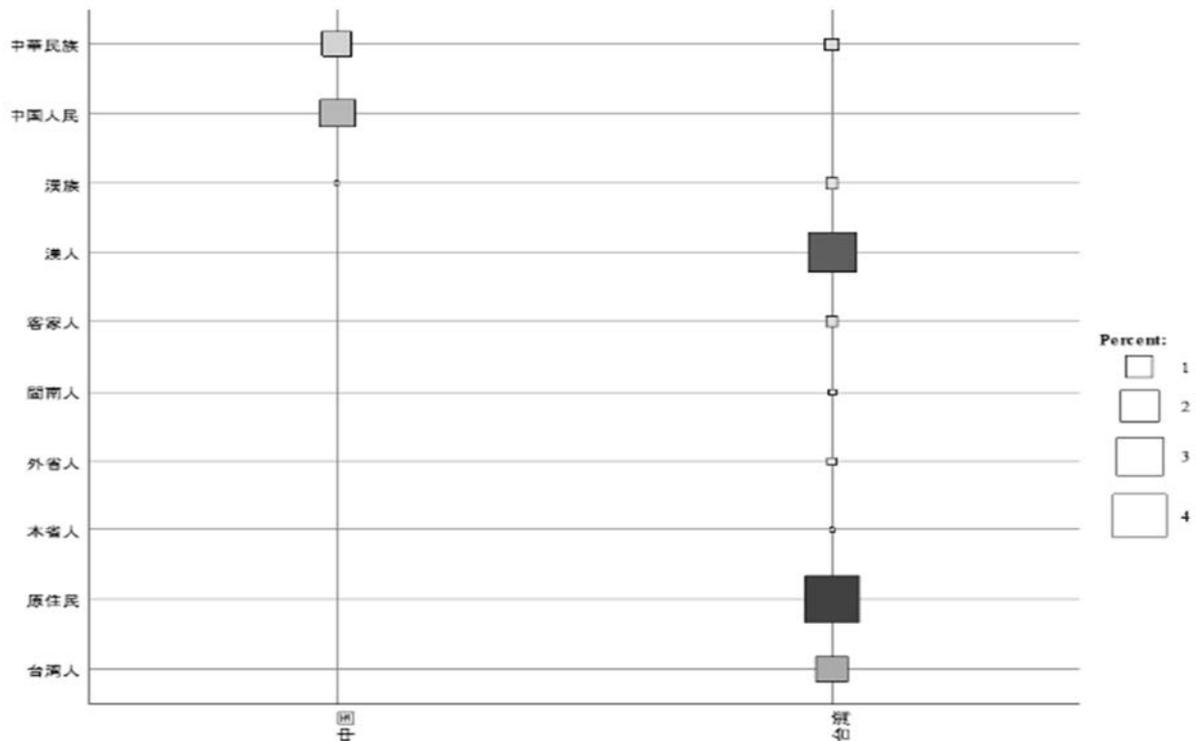


図5 中国・台湾の歴史教科書における諸概念の出現割合

図5は、中国と台湾の歴史教科書における様々な語の出現割合を視覚化したものである。正方形の大きさは教科書中に出現した割合を示しており、その割合の目安は右端の“Percent”を参考されたい。今回は、統合概念として「漢人」「漢族」のみならず、大陸中国における統合概念と推測できる「中華民族」「中国人民」、台湾社会で様々に使用されている「閩南人（福佬人）」「客家人」「外省人」「本省人（外省人が渡台する以前から台湾に居住していた漢人を指す語。1946年の国府行政院訓令により中華民国籍を回復した男性およびその子孫を指す。いっぽうその「訓令」によらず、中華民国籍を有して台湾に居住する男性およびその子孫を外省人として区別した（若林，2001。）」「原住民（族）」そして「台湾人」について分析を行った。

図5からは、以下の2点の特徴を指摘できる。まず、大陸中国の歴史教科書では、「漢人」はおろか「漢族」もほぼ使用されていないという点は非常に興味深い。先に見たように「漢人」は台湾に特徴的な語であったため大陸中国では使用されていないことが考えられる。しかし、「漢族」は大陸中国でも人口的に圧倒的多数であり、中国の歴史の大部分は「漢族」の歴史とも言えるにもかかわらず（史継忠，1993）、「漢族」という語は今回分析した教科書の中で1回しか使用されていなかった。今回分析に使用したのは人民教育出版社と人民出版の2出版社の教科書であり、1つの出版社では「漢族」という語が1度も登場しなかったということである。つまり、「漢族」という語は大陸中国における公的知識の中には位置づけられておらず、それ故に、歴史

教科書の中では統合機能も持ち合わせていないといえる。

そして中国では、「漢族」を使用しないかわりに、「中華民族」または「中国人民」という語が一定数使用されていた。それぞれの具体的な使用例は以下の通りである（下線は筆者）。

< 中華民族 >

「秦は平定した六国を基礎にして周辺地域を政治的に支配し、統一帝国の規模を拡大しただけでなく、中華民族の多元一体構造形成にも貢献した。（秦朝在平定六国的基礎上，對周边地区施行政治控制，不僅擴大了統一帝國的規模，而且推動了中華民族多元一體格局的形成。）」

「中華民族は一致団結し、外敵から身を守り、アヘン戦争以来の屈辱を晴らし、民族の尊厳を守り、国内の民主革命の勝利のために強固な基礎を築いた。（中華民族団結一致，共御外敵，洗雪了鴉片戰爭以来的民族恥辱，捍衛了民族尊嚴，併為民主革命在全国的勝利奠定了堅實的基礎。）」

< 中国人民 >

「抗日戦争は、中国の近代史において、国家主権を守るための最大の闘争であり、帝国主義の侵略に対する中国人民の最初の完全な勝利であった。（抗日戦争是中国近代史上最偉大的維護国家主權的斗争，中国人民反对帝国主義侵略第一次取得了完全勝利。）」

「社会主義の基本体制が確立されたことで、中国人民は社会主義への道を探索し始めた。（隨着社会主義基本制度的確立，中国人民開始了建設社会主義道路的初步探索。）」

「中華民族」と「中国人民」の使用法の違いとしては、「中国人民」が近現代の文脈で使用されているのに対して、「中華民族」は古代から現代までのあらゆる文脈の中で使用されている。このように、中国では特定のエスニシティに偏ったり、「漢族」と少数民族との間での軋轢を避けるために、「中華民族」や「中国人民」のように包括的な概念が用いられていると考えられる。

2点目の特徴は、台湾の歴史教科書では「四大族群」に関する語はほぼ使用されておらず、「原住民（族）」または「漢人」が統合概念として用いられている点である。台湾社会では「四大族群」という語が一般的に使用されているにも関わらず、図4をみてもわかる通り、これらに関する語は教科書内でほとんど使用されていなかった。そのかわり、「原住民（族）」と「漢人」という語の出現割合は相対的に高くなっていた。ここから、台湾の歴史教科書におけるエスニック的境界線は「四大族群」に沿って引かれているというよりも、「漢族」と「原住民（族）」との間に引かれているといえる。また、両者を包括する概念として「台湾人」という語も一定数教科書内で使用されていることがわかった。

最後に、「四大族群」という概念がほとんど使用されていなかったことつ

て、「国民」形成における「歴史」の意義を踏まえながら考察していきたい。ベネディクト・アンダーソン(1987)が「共同体は、その真偽によってではなく、それが想像されるスタイルによって区別される」(18頁)と指摘したように、「国民」形成の際には共通の歴史を如何に想像するかが重要である。台湾の「四大族群」は、台湾島に居住している期間が異なり、特に「外省人」に関しては第二次世界大戦後以降の非常に短い歴史しか有していない。そのため、この概念では共通の歴史記憶を形成することができず共同体意識を醸成することが難しい。ゆえに「四大族群」のうち「閩南人」「客家人」「外省人」はさらに上位概念である「漢人」として包摂することで、共通の歴史記憶の形成を図ろうとしているのではないかと考えられる。

以上をまとめると、中国・台湾ともに、歴史教科書における統合概念は、それぞれの社会一般で使用されているそれよりもさらに包括的なものとして記述されていると言えるのである。

おわりに

以上本論で、台湾と中国の歴史教科書を対象として、統合概念としての「台湾人」「中国人」と「漢族」、「漢人」、「原住民族」との関係性を明らかにしてきた。本論で明らかにしたことは以下の4点である。

第一に、台湾の歴史教科書では、「漢人」と「漢族」を使い分けていることが明らかとなった。すなわち、一般に用いられる「漢族」は、中国大陸の「漢族」を指し、台湾の「漢族」は「漢人」と称している。この区別は、エスニシティとしては同じであっても、「台湾の漢族」、台湾という空間に居住する漢族という点で台湾人認識の萌芽として見なせるのではないか。もちろん、あくまで過去を対象とする歴史教科書のなかでという制限があるため、仮説の段階に留まっており、さらなる検討が必要である。

第二に、中国・台湾の教科書ともに、マジョリティたる「漢族」や「漢人」という語を多用しない、あるいは強調しないことによって統合を測ろうとしていることが明らかとなった。これは、中国でいえば多くの文献で「中国は多民族国家であり、総人口の絶対多数を占める漢族のほか、・・・など55の少数民族が・・・」のような文章を頻繁に目にする。つまり、中国の教科書では、あえて「漢族」単独で使用しないことで、「中国人」「中国人民」「中華民族」とは、「漢族」と「少数民族」とが対等に構成され、少なくとも「漢族」中心を意味しないことを示していると言える。台湾においても、「漢人」は原住民よりも新しく、400年前からの「移住」者であることを強調していた。「漢人」は人口比から確かに台湾の主流ではあるが、そのなかで「台湾の最初の住人(臺灣最古の住民)」として原住民への配慮があると考えられる。ただし、原住民族に関しては教科書の1章分を割いているものの、それ以外ではほぼ登場せず、やはり「漢人」中心の歴史であるという限界も指摘できる。

第三に、一般に科目としての歴史は、学習者が同じ歴史を共有してきたこ

とを認識し、その意味で国民形成にとって重要な科目であり、共通の歴史を想像させることが歴史教育の最も重要な意義の一つであると言える。台湾社会では一般に、歴史教科書に見られる「漢人」よりも、「客家人」、「閩南人」、「外省人」といった、「漢人」のさらに下位概念が使用されてもいる。こうした語が歴史教科書で登場しないのは、それぞれの歴史的背景に鑑みれば、そうした記述では共同体としての一体感を醸成することが難しいため、あえて歴史教科書のなかでは「四大族群」を使用せず「漢人」と記述していると考えられる。

第四に、現在では「漢人」と「原住民族」を統合する概念として「台湾人」が社会で広く使用されているが、歴史教科書においては、「台湾人」が日本統治期に初めて登場し、日本との関係で使用されていることも明らかとなった。実際の「台湾人」の使用がいつからかは明確ではないが、歴史的に「台湾人」という統合概念や認識が日本統治時代以降に日本人との対比によって形成されたと位置づけることも可能ではないだろうか。この点も非常に重要な問題であり、今後の検討課題としたい。

引用・参考文献

教科書

【台湾】

薛化元主編（2019）『歴史 第一冊』三民書局。

薛化元主編（2020）『歴史 第二冊』三民書局。

戴寶村主編（2019）『歴史 第一冊』龍騰文化出版。

陳登武主編（2020）『歴史 第二冊』龍騰文化出版。

【中国】

人民教育出版社課程教材研究所・歴史課程教材研究開発中心編著『歴史①』人民教育出版社。

人民教育出版社課程教材研究所・歴史課程教材研究開発中心編著『歴史②』人民教育出版社。

人民教育出版社課程教材研究所・歴史課程教材研究開発中心編著『歴史③』人民教育出版社。

朱漢国主編『歴史 第一冊』人民出版。

朱漢国主編『歴史 第二冊』人民出版。

朱漢国主編『歴史 第三冊』人民出版。

日本語文献

アントニー・D・スミス著、高柳先男訳（1998）『ナショナリズムの生命力』、晶文社。

王甫昌著、松葉隼・洪郁如訳（2014）『族群：現代台湾のエスニック・イメージネーション』、東方書店。

沼崎一郎（2014）『台湾社会の形成と変容－二元・二層構造から多元・多層構

- 造へー』, 東北大学出版会。
- 樋口耕一 (2020)『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して』, ナカニシヤ出版。
- ベネディクト・アンダーソン著, 白石隆・白石さや訳 (1987)『想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』, リブロポート。
- 松尾豊・友部博教・橋田浩一・中島秀之・石塚満 (2005)「Web 上の情報から人間関係ネットワークの抽出」『人工知能学会論文誌』20 巻 1 号, 46-56 頁。
- 山崎直也 (2009)『戦後台湾教育とナショナル・アイデンティティ』, 東信堂。
- 林初梅 (2009)『「郷土」としての台湾—郷土教育の展開にみるアイデンティティの変容』, 東信堂。
- 若林正文 (2001)『台湾—変容し躊躇するアイデンティティ』, ちくま新書。
- JICA (2007)『多文化共生に関する現状および JICA での取り組み状況にかかわる基礎分析』, 独立行政法人国際協力機構国際協力総合研修所。

英語文献

- Liu, M. (2004). A society in transition: The paradigm shift of civic education in Taiwan. *In Citizenship education in Asia and the Pacific* (pp. 97-117). Springer, Dordrecht.

中国語文献

- 陳立鵬・閔芸「中国共産党民族教育政策建設百年歷程」『中国民族教育』第 6 期, 2021 年, 11-14 頁。
- 教育部 (2018)「十二年国民基本教育課程綱要国民中小学暨普通型高級中等学校 (社会領域)」。
- 劉耀星 (2007)「台湾族群形成析論」『赤峰学院学報 (漢文哲学社会科学版)』第 2 期, 62-63 頁。
- 馬戎 (2004)「理解民族關係的新思路—少数族群問題的“去政治化”」『北京大學学報 (哲学社会科学版)』第 41 卷第 6 期, 122-133 頁。
- 史繼忠 (1993)「漢族的形成及其歷史地位」『貴州民族研究』第 2 期, 21-26 頁。
- 行政院 (2022)「族群」<https://www.ey.gov.tw/state/99B2E89521FC31E1/2820610c-e97f-4d33-aa1e-e7b15222e45a> (2023 年 1 月 20 日最終閲覧)
- 葉世明 (2003)「台湾族群形成探析」『貴州民族研究』第 23 卷第 2 期, 168-172 頁。